

---

# ピータバロ 2 ~ 1 2 番目の肖像画 ~

風梨凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピータバロ2 ～12番目の肖像画～

### 【Nコード】

N2965E

### 【作者名】

風梨凜

### 【あらすじ】

表向きは名のある寄宿舎学校、裏では学校ぐるみの窃盗団のピータバロ・シティ・アカデミアの専属画家となったキース・L・ヴァンベルトは、突然、彼の目前に現れた古い洋館の姿に目をみはる。その館の中で出会った一人の少女。「私の肖像画を描いて欲しいの」だが、その少女は、館に住む幽霊だった。

(前書き)

短編「ピータバロ」の続編です。キースがピータバロ・シティ・アカデミアの専属画家になった経緯や、相棒の犬の名前がパトラッシュユになった理由などは、前作にありますので、よろしかったら、そちらもお読み下さいね。

ロンドンから鉄道にのって北に約一時間。

小都市、ピーターバロ。

ゴシック様式の大聖堂と、美術館。それに続く小道に点々と出された無名画家たちの露店。この都市には、古き良き時代のイギリスの風景が、今も多く残っている。

その路地を油絵用のキャンバスバッグを抱えた青年が、不機嫌な様子で歩いていった。

歳は17。ぼさぼさの小麦色の髪に、破れたGパン、絵具で汚れた上着。身なりに気を使えば、それなりに女の子に好かれそうな顔だちなのだが、彼自身はそんな事には一向に興味がないらしい。

その青年、 - キース・L・ヴァンベルト - は、傍らにいる彼の相棒、“パトラッシュ”の頭をくしゃくしゃと、なぜて言った。「あゝあ、明日はクリスマススイブなのに、今日もニセ物造りに精を出せかよ。シャガールでもユトリロでも、お望みなら、何でも描いてやるけど、肝心の俺の絵はいつ描かせてくれるんだろ」

キースの言葉にパトラッシュが、同情をこめた小さな声音でくわんと鳴いた。

このパトラッシュ、雑種の中型犬だが、毛並みの茶色と白の模様はなかなかいいコントラストをしている。それに垂れ下がった茶色の大きな耳が、けっこう可愛い。

自分で選んで、あの学校の専属画家になったものの、お高くとまった女教師のレイチェルにアゴで使われるのは、やっぱり胸くそが悪くてしょうがない。

そういえば、もう夕方だっというのに、昼食も食べてないやと、

キースは、小さくため息をつくど、2ブロックほど先の木々の間に  
見えている豪華な白い建物に目をやった。

“ピーターバロ・シティ・アカデミア”

それは、このあたりでも裕福な家の子息、令嬢が通う寄宿舎制の  
学校だった。ひよんな事から、破格に高い契約金でこの学校の専属  
画家になったキースだが、学内の様子を知れば知るほど腹がたつて  
仕方なかった。（詳しくは第1話 ピーターバロをお読みください）

偉そうな事言っても、正体は学校ぐるみの“絵画泥棒”兼“詐  
欺師”じゃん。畜生！ 見とけよ。今に泣き面かかせてやるから。

ちよっぴり熱くなってしまっているキースを諷めるかのように、  
パトラッシュがその上着の袖口を軽く、くわえて引っ張った。

「わかってるって、焦るなよって言いたいんだろ？」

その時、ちらり、ちらりと粉雪が降ってきた。ふと空を見上げた  
時、自分の視界に飛び込んできた洋館の姿に、キースはあれ？ と  
首を傾げた。

おそろしく古びた煉瓦の壁には、枯れた蔦がびっしりとこびりつ  
いてしまっている。見晴らし台のあるバルコニーや、豪華な玄関口  
のアーチを見てみれば、それなりの資産家の住まいだったのだらう  
が、それも今は見る影もない。それより、キースにとって問題なの  
は……

昨日まで、こんな洋館、ここにはなかったぞ！？

という事だった。

恐る恐る、玄関口に近づいてみた。近づけば、ろくな事はない事がわかつているのに、好奇心を止められない。キースという青年は、つくづく損な役回りに生まれついてしまっているらしい。

玄関口のポーチを通り抜けて、そうつと扉に手を触れてみると、彼を待ちかねていたように、扉がすうつと勝手に開くではないか。その時、横にいたパトラッシュが、突然、館の中に駆け込んでいった。

「おいつ、不法侵入だぞっ！」

パトラッシュを追いかけようと、館に一步、足を踏み入れた瞬間、キースはあつと小さく声をあげた。

円形の大広間の壁にぐるりと掛けられた何枚もの肖像画

「1、2、3……11枚も？」

「啞然と絵の枚数を数えながら、

「女の子の肖像画?! でも、最初の1枚はまだ赤ん坊だ……」

この11枚の肖像画は、この女の子が生まれた時からの成長記録か? にしても、この館は……

蜘蛛の巣にまみれた館の中は、どうみても幽霊屋敷に近かった。

解せない顔つきで、ぐるりと屋敷の中を見渡してみた。人っ子、一人いそうにない廃墟の中で、大広間の片隅に残された、窓の高さをはるかに越えた埃まみれのクリスマスツリーが、寂しげにキースとパトラッシュの姿を見下ろしている。

「絵の下に、モデルになった女の子の名前と肖像画が描かれた日付が書いてある。えーと、一番、最初が、アンナ1歳、1960年、

12月25日」

1960年って……50年前じゃないか？！

2枚目が描かれたのは、翌年の12月25日……3枚目はその翌年の12月25日

「もしかしたら、この肖像画って、全部、クリスマスに描かれたものなのか?!」

11枚目の肖像画の下には、“アンナ11歳”と書かれている。日付は1970年の12月25日、40年前のクリスマスだ。白いドレスに身を包んだ少女が、飾り付けられたクリスマスツリーを背景に、少しはにかんだような笑みを浮かべている。肩までの少しウエーブがかった栗色の髪とそれと同色の大きな瞳、ばら色の頬。白い毛皮のタフタがついた赤の上着が、いかにも聖夜で、おまけに金持ちっぽい。

「一体、何なんだ、この館は？ それにこの肖像画は？」

その時、キースの横にいたパトラッシュが、くわんと鳴き声をあげた。

「何だよ、邪魔すんなよ。今、俺は思考中……」

パトラッシュの方向に降りかえった瞬間、キースはぎょっと大きく目を見開いた。そして、もう一度、11枚目の肖像画に目をやってから、おそろしく複雑な表情をした。

「お前、誰?! って、これ愚問……だよな」

キースとパトラッシュの後に立っている少女。

白いドレスにタフタのついた赤の上着、栗色の髪と瞳、はにかん

だような微笑。

それは、まぎれもなく肖像画に描かれていた“アンナ11歳”だったのだ。

「……でも、変じゃないか……あの肖像画は40年も昔に描かれた物だろ？」

キースの言葉に、少女はにこりと笑い、鈴のような可愛い声音でこう答えた。

「変じゃないわよ。だって……」

その続きを聞けば、また、ややこしい事になる事がわかっていただけれども、もう逃げれそうにもない。

「私、幽霊だもん」

ほづら、やっぱりだ。

「パトラッシュュー、窃盗団の次は、幽霊だつてよー」

キースはパトラッシュューのそばに膝まづき、“助けてくれよ”と、言わんばかりに彼の相棒の首根っこにしがみついた。そして、

「……で、幽霊が、俺に何の用？」

と、おそろおそろ、女の子の方に視線を向けた。

その瞬間、少女の幽霊は、つぶらな目を大きく瞬かせた。何故なら、

このお兄さんの瞳って……

なあって、綺麗な琥珀色！

どうの昔に止ってるのに、何でときめいてんのよ！？ 私の心臓

!!

少女の幽霊は、あたふたしながら、

「わ、わ、私の名前は、もう分かっているとと思うけど、アンナっていうの。……で、その肩にかけたキャンパスバッグと、油絵の具の匂い。お、お兄さんって、もしかして画家？」

「も、もしかして、そうだったら、な、何？」

とてつもなく悪い予感がする。それでも、このアンナが幽霊になってまで、俺の前に現れたという事は、もう自分はこの状況から逃げられない……って事なんだよな。

すると、アンナは、その心配通りのややこしそうなお願いをしてきた。

「肖像画を描いて欲しいの！ それも、今年の12月25日までに」  
顔色は幽霊だけあって蒼ざめてはいるが、見た目は可愛い少女だ。  
いきなり目玉が転げ落ちるなんて、そんな事もなさそうだ。キースは、訝しながらも、

「……肖像画を描けって、また、何で？」

「私は、死んでしまったから。12回目の誕生日プレゼントの肖像画を見れないままに」

誕生日プレゼント？ 12回目？ って事は……

……が、その続きを言おうとした時、

“父と子と聖霊の名において、父なる神へ信仰の告白をせよ！  
心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、”

神である主を愛せよ！“

高らかで、おまけに耳障りな大声が外から響いてきた。今度は何だ？ と、キースは、そうつと玄関脇の小窓から外の様子を覗いてみた。すると……館の玄関前に、無駄にでかい背丈の男が立っている。

キリスト教の聖職者たちが、ふだん着る丈の長い服・アルバの上に白い上衣を羽織り、手には不自然に大きな十字架を掲げ持ち、どう見ても“いい人”には見えない、強面の顔がまえの、その男を見て、

「また、えらく胡散臭い奴が門の前まで来てるぞ……待てよ。あの男、前にシテイ・アカデミアの事務所で見ただ事があるぞ。確かあの時は、レイチエルと持ち込んできた骨董品の価格交渉をしていた。聖職者のくせに、えらく業突く張りな男だなと俺はム力ついたので覚えてる」

一寸、言葉を止めてから、キースは、アンナの方に目を向けて言った。

「あいつ、知ってるぞ。町外れの教会の神父だろ」と、

「あれは、“エクソシスト”よ！ 2、3日前にここの館に訪ねてきて、親切そうな言葉で私を呼び出したくせに、それからは態度を一変させて、私を被おうとしつこく館にやって来るの」

「エクソシストお？！ あの“悪霊祓い”ってやつか？ あいつって、胡散臭いと思っていいたら、そんな稼業にも手を出してんのか」

でも、それって……

エクソシストが出てくるって事は……この娘って、もしかして、あ、悪霊なのか？

「あのね、そんなわけないでしょっ」

若い画家の考えを読み取ったのか、少女の幽霊は心外だと言わんばかりに、ぶんぶんと大きく首を横に振った。

拗ねたようなその仕草がやけに可愛い。待て、待て。俺は、決してロリコンなんかじゃないんだから。

まあ、そんな事は置いといたとしても、あんな男がやって来るなんて、やっぱり何か腑に落ちない。

「でも、それなら、どうしてエクソシストがここに来るんだよ」

「だって、最初は普通の神父さんかと思ったから……あいつ、あれでも靈感があつて、お困りな事があるなら力になりますよって、でも、それって私の肖像画を手に入れるための嘘だったのよ」

「肖像画って、あの11枚の肖像画の事か？」

「私はよくわからないんだけど、私のお父さんって、けっこう名がある画家だったらしいの」

アンナの言葉に、キースは足元にいる - 相棒 - パトラッシュと目を目を交わした。別に何かを語り合うわけでもないが、“なるほどね”とお互いに意思疎通ができていような気がするから不思議なものだ。

「まあ、この子の父親が有名画家だとすれば、その人が描いた絵ならば、相当な高値がつくだろうからな。きっと、あの神父は、11枚の肖像画を不法に手に入れて高く売りさばこうとしているんだ。それで、館に居座ってる邪魔なアンナをとつとこの世から被つてしまおうとしてるんだな」

……で、その肖像画の売り先がレイチェル……表向きは名門、裏は窃盗団のピータバロ・シティ・アカデミアの女教師ってわけだ。あの女もろくな商売してないなあ。

にしても、父親が有名画家？……その有名画家って、誰なんだ？ キースが少し考え込むように俯いたその時だった。

“悪霊退散！！ すべてからく、この場から立ち去るべし！”

その声と同時に、アンナの体が広間の壁まで吹っこんでいった。……おい、おい、エクソシストを名乗っているだけあって、腐っているわりには、あの神父は、靈感というか、おかしい霊力まで持っているらしい。

壁に打ちつけられたアンナは、床の上につずくまり、ぼろぼろと涙をこぼしている。

「おい、大丈夫か？！」

幽霊だから死にはしないだろうが、こんな小さな女の子に乱暴すぎるんじゃないのか。

“悪霊退散！！ 悪霊退散！！”

キースは、うるせえなど、口元で呟いてから、玄関の方へつかつかと歩いていった。そして、その扉を力まかせに開いた。

「近所迷惑なんだよっ！ 坊主は、こんな所でわめいてないで、おとなしく教会でお題目でも唱えてろっ！」

目の前に突然現れた青年の姿に、エクソシストはきょとんと目を瞬かせる。

「お前……誰だ!?!」

「誰って、ただの画家だよ」

「さては、悪霊の下僕か。お前、神に背いて魂を悪魔に売り渡したな!?!」

馬鹿馬鹿しすぎて、まともに話なんか聞いてられない。

再び、エクソシストが空に十字架をかざそうとした時、キースはこそつと、隣に控えている相棒に何かを囁きかけた。その瞬間、分かったとばかりに、

くわん、くわんっ!!

激しく吠えながら、パトラッシュはエクソシストに突進していった。

「貴様っ!! くそお、そんな番犬まで備えていたとは!」

強い語調とは裏腹に、“覚えておけよ!”と、定番の逃げ口上を残して、あたふたと、エクソシストはパトラッシュに追いかけられながら、その場を去っていった。

「あゝあ、口ほどにもない奴」

あっちの方はパトラッシュに任せればいいやと、キースは館の扉をぱたんと閉めた。そして、泣きべそをかいているアンナに、困ったように視線を向けた。

「泣くなよ……幽霊が泣いてると、よけいに悲しい感じがする」

それでも、泣いているアンナを見かねてか、少し声を和らげて言

った。

「とにかく、話くらいは聞いてやるよ……何で、今年の12月25日までに、肖像画を描く必要があるんだ？ それを描いたら、何がどうなるっていうんだ」

……が、青年画家と目を見交わした時、止まっているはずの幽霊の少女の心臓は、またも、高鳴ってしまうのだ。

「ク、クリスマス - 12月25日 - が、私の誕生日だった。

……で、画家だった私のお父さんは誕生日ごとに私の肖像画を描いて、それを館の大広間に飾ってくれたの。けれども、体が弱かった私は、11歳で死んでしまった。12枚目の肖像画ができあがる前に」

そして、アンナは目の前の若い画家に懇願した。

「12枚目の肖像画が見たかった。その思いが邪魔をして、私は、いつまでも天国に行けないの。だから、お願い！ 私の肖像画を描いて。今年の12月25日を逃してしまったら、私はまた来年のクリスマスまで、この世をさまよう事になる」

やっぱり、そんなことかと、ふうつと一つ息を吐く。それから、キースは腑に落ちない様子で少女に言った。

「40年も前にお前は死んだんだろ。この街には、他にも画家はごろごろいたはずなのに、何で今頃、俺にそんな事を頼むんだよ。館に引き込むなら、もっと靈感の強そうな別の奴がいたんじゃないのか」

「……引き込むなんて、そんな言い方ってないわ！ 私は、むやみに生きてる人に害をあたえるなんて、ひどい事はしないわよ」

「そう？ それを聞いたら、一安心だ。……じゃ、俺、もう帰るか」

強気な態度をとってはいたが、正直言って怖かった。どんなに可愛かったって幽霊は幽霊だ。こんな場所からはさっさと出て行ってしまうおうと、キースが戻ってきたパトラッシュを伴って館の玄関に向かおうとした時、

「待ってよ！」

その声とともに、館の扉が勝手にぱたんと閉まった。

「だって、駄目だったのよ。あなた以外にも、何人もの画家に肖像画を描いてもらったけれど、どれもこれも、どこかが違っていて……」

幽霊の肖像画を描く奇特な奴も世間にはいるんだと、キースはちよつと驚いてしまった。でも、それが気に入らなかつたなんて、この幽霊、絵に関しては、子供でもけっこう見る目があったりして……そうか、確か、この娘の父親は有名な画家だつたつて言つてた。

思わず、シテイ・アカデミアのクソ生意気な女生徒、ミルドレッドの姿が脳裏に浮かび、苦笑する。あいつ、言葉は辛らつただけど絵を見る審美眼は確かだからな。すると、再び、アンナが言った。  
「40年間、誰一人として、私が満足のゆく肖像画を描いた画家はいなかつた」

それがキースの画家魂に火をつけてしまったのだ。

おもしろい。……つて事は、この幽霊に認められたら、俺の絵は確かな価値があるつて事なんだよな。

「分かつたよ。描いてやる……肖像画だつたな。だから、もう泣くなっ！」

そうと決めると怖さなんかより、絵を描く事に没頭してしまう性

格だ。持ってきた絵具の入ったキャンバスバックをアンナの前にどさりど置くと、キースは、取り出した鉛筆で白いキャンバスにさらさらと少女の輪郭を描きだした。

「ただし、今日は下書きだけ。残っている仕事を片付けないと、レイチエルにまた、どやされる。クリスマスにはまだ2日あるだろ、だから、とりあえず今日は俺を帰してくれ」

「ちゃんとここに戻ってくる？ 約束できる？」

「戻ってくるよ」

空でしたようなその返事に、アンナは頬を膨らませたが、キースは一心に鉛筆をキャンパスに走らせている。大きな瞳に、どんな表情をつけてやるうか、なんて興がのってきた、ちょうどその時、

「戻ってこなかったら、呪ってやるんだから！」

可愛い顔でアンナが言った怖い言葉。ぴたりと手を止め、キースは無理に笑顔を作ってみた。でも、なんだか不安になってきた。

「さっき悪霊じゃないって言ったじゃないか！」

「だって、それが幽霊の専売特許だもん」

専売特許ね……。

その時、街の教会の鐘楼の鐘が午後7時を打った。

それと同時に、暗い館の中に、ぽつぽつと蠟燭の炎が勝手に燃え立ち、埃まみれのクリスマスツリーを照らし出した。色が剥げ落ちたガラスの玉飾りが仄暗い光を放ち、陰鬱な風景の中に立っている少女の姿が、その中で寂しげに揺れた。

「今日はこれでおしまい。じゃ、俺はもう行くから」

出来かけの肖像画。それを手に持ち、不安げなアンナに、一時の別れを告げて玄関を出た時、キースは少し後ろめたいような気分がした。

枯れた鳶にびっしりと覆われた、寒々とした洋館。

いくら幽霊でも、こんな気色悪い場所に小さな女の子を一人つきりにしてもいいのか……

肖像画の下書きをしている間中、パトラッシュの頭をなぜながら、はみかんだような笑みをこちらに向けていたアンナ。

目茶目茶に可愛かったんだよなあ。

……が、キースは首をぶるんと一つ振ると、

駄目駄目っ、変な心を持つちまったら、こつちまであの世に引き込まれちまうぞ。肖像画が描けたら、あんな幽霊とは、きれいさっぱりお別れなんだから。

そう自分の心に言い聞かせて、古い洋館から出て行った。

\* \* \*

暖かな体温を持った一人と一匹が出て行った後の洋館は、ひどく冷めざめとしていた。ひび割れた洋窓から、月の光が青白く輝き、12月の終わりの寒さを余計に感じさせた。するとその時、不意に黒い影がその光を遮ったのだ。

黒い影は、みるみるうちに人の姿になる。

黒のレザージャケットにブーツ。

端正な顔にかかる亜麻色の髪と、赤みがかった灰色の瞳。

アンナは、突然、館に現れた男の姿に驚き、瞳を瞬かせた。

……誰？

ところが、

「見覚えのある洋館があると思えば、まだ、お前はこの世をさまよっていたのか」

歳は20代半ばといったところだろうか。短くため息をつくど、  
「だから、あの時、俺は”死にたくないよな”って、声をかけてやったのに」

「えっ、嘘っ……あなたって、まさか……!？」

男は、そんな少女の言葉を手で遮って、大広間の壁を指差す。

「ここに掲げてある11枚の肖像画は、お前が作り上げた幻だろう？ 本物はとつくの昔に売りさばかれて、今では方々に散り散りになっているっていうのに、そんな物を探すために、お前は、この世に居残ってるんじゃないだろうな」

「違うわよっ、ただ、私は12枚目の肖像画を描いてくれる画家を見つけたかっただけ……売られて何処にあるか分からない他の肖像画のことなんて、とつくに諦めてる」

「12枚目の肖像画を描いてくれる画家？ ……まあ、どうしようも勝手だが、せいぜい、その画家まで、あの世の道連れにしないように気をつけるんだな」

意味深な男の声音に、幽霊のアンナは、心底、ムカつく。

「冗談じゃないわよ！ 私は悪霊じゃないんですからねっ。あなたこそ、体のまわりから血の匂いがぶんぶんしてるじゃない。ここは肖像画を描いてくれる画家のために、私が作りあげた館！ いわば、私の聖地なの。あなたみたいな人を招いた覚えはないわ。だから、

とつとと出て行つて！」

聖地か……と、灰色の瞳の男は、古びて埃だらけの洋館をぐるりと見渡す。この幽霊の少女の霊力では、この程度を作り上げるのが精一杯だったのだろうか……。物憂げな視線を少女に向けてから、男は、分かったよと口元で呟いた。踵を返して、そのまま玄関へ向かう。

その後姿に、

” 入ってくる時は窓からなのに、出てゆく時は、きちんと玄関からなんだ”

と、アンナは、突っ込みを入れたくなつてしまつたが、

「11枚の肖像画は、” 聖なる日に生れし子の聖なる記録” ……か。けれども、俺は、つい最近に、その絵のオリジナルを見たことがある。ロンドン郊外に大層な館を構えているグレン男爵。11枚の肖像画の少なくとも1枚は、彼が持っているぞ」

その言葉に、えつと声をあげてしまった。けれども、身を乗り出してきた幽霊の少女に、

「別にこんなことを言つて、お前を惑わすつもりはなかつたんだ。ただ、俺はこの洋館の周りにおかしな輩を見かけて……いや、気にしなくても、あんな者はすぐになくなるさ。……満足のゆく12枚目の肖像画が早くできるといいな。そして、クリスマスの日には、天に無事に召されることを心から祈っているよ」

男が浮かべた、今までと違って変わった柔らかな笑み。

洋館の玄関の扉を開いて彼が外へ出ていった後で、アンナは不思議な思いで目を瞬かせた。天井からひらりと一片の白い羽が舞い降りてきたからだ。

たった今、生まれたばかりの天空の光のように、一片の穢れもない純白の輝きが、優美な軌道を描きながら落ちてくる。

天使の羽……？

その美しい純白の輝きと、たった今、館にいた男の黒い姿が、どうしても繋がらず、アンナは首を傾げるばかりなのだった。

\* \*

12月24日の昼下がり

寄宿舎学校、“ピータバロ・シティ・アカデミア”

超豪華な学内には、クリスマス休暇のために、人っ子一人いない。そのせいか、普段でも、広すぎると思っていた回廊がよけいに長く感じられる。

がらんとした学校のアトリエの中で、キースは膨れ面をさらしながら、絵筆を動かしていた。足元では、相棒のパトラッシュユが気持ちよさそうに眠りこんでいる。

「あゝあ、休暇が終わるまでに模写を終えるなんて無茶苦茶、言いやがって！」

ユトリロの“ドウィユの教会”

この模写を本物だって売りつけたら、そりゃあ、高値で売れるだろうよ。

キースが専属画家として契約している“ピータバロ・シティ・アカデミア”は、お金持ちの子息、子女の教育機関としての顔と、美術品の窃盗、詐欺を生業としている2つの顔を持っている。

口がうまくて、色仕掛けも何のその、女教師レイチエルから、由緒たつぷりの学校が所蔵している有名画家の作品ですわよ、なんて言われたら、絵の事なんてわからない成金たちはコロリと騙される。

自分が模写している“ドウィユの教会”の絵に目を向けて、キースはちよつと苦い笑みを浮かべた。白っぽい画面の中央にたたずんでいる、寂しげでなんとなく儂げな白い教会。……それが、昨日見た、白い服の少女の姿に重なった。

幽霊でも、やっぱり約束しちまったしなあ……

アトリエの隅に置いた、昨日描いたアンナのデッサンの方に視線を向けた時、

「キース、メリークリスマス!!」

ボタンと彼のアトリエの扉が開け放たれ、小生意気な声音の少女が姿を現した。艶やかな黒い巻き毛と輝く漆黒の瞳。アイドル並に可愛い溢れる笑顔。

「メリークリスマス、なんて気分じゃねえよ」

ぶつきらぼうに、そう答えたキースに、少女はさらに“生意気”度を増して言った。

「仕事があつて良かったじゃない。汚い路地の露店で売れない絵を描いてるより、よっぽど、ましよ」

「ミリー……お前なあ……」

キースは、学園の生徒の一人、可愛いけど辛らつなミルドレッド - “通称、ミリー” - の顔を呆れたように見返した。考えてみれば、この娘に懇願された事がきっかけで、彼は学校ぐるみの窃盗

団と関わる決心をしたのだ。

幽霊でも、アンナは見た目には、ミリーと同じくらいの年頃か。俺って、つくづく、このくらいの歳の女の子に弱いのかも……

でも、俺はロリコンなんかじゃないぞ。断じて、それだけは違う！

ぶるんと首を振ったキースに不審そうな視線を向けると、ミルドレッドは後ろに隠し持ってきた包み袋を、窓辺の棚の上にどかんと置いた。

「とりあえず、差し入れよ。それ、まだ出来上がらないでしょ？

一人で食べ物もないクリスマスなんて、悲惨すぎるもんね」

袋には、1本のワインとホールチーズが入っていた。

「俺に、ここで”一人”で、ワインとチーズでクリスマスを祝えっ  
てののか？」

その言葉に、黒い瞳の少女は一瞬、口をつぐんだ。

青年画家の方にちらと目を向ける。けれども、

「あら、パトラッシュもいるじゃない」

つんと冷たく言い放つ少女。口じゃ、とつてい勝てそうにもない。まあ、ミルドレッドが口ほど悪い娘ではない事はわかってはいるのだが。

「わかったよ。ワインとチーズは有難く、いただきます。お前はどうぞせ、セレブなご学友たちと、クリスマスパーティーだろ？ なら、さっさと行っちまえよ！」

まあねと、かなり心残りの表情を浮かべた時、ミルドレッドはふと、アトリエの隅にあった、見たことのない少女のデッサンに気づいた。

「それ誰のデッサン？ すごく可愛い娘ね……キースの知り合い？」  
「別に……誰でもいいだろ。お前には関係ないし」

愛想のない彼の反応と、彼が描いた少女の絵に、少しムカつく。

「あのね、分ってるの！？ そんなデッサンなんか描いてるから、キースは、仕事が遅いって、いつもレイチエルに怒られちゃうのよ」「ユトリ口の模写はクリスマス明けまでには、きちんと終わらせませぬ。ミリーたちにご迷惑はおかけしません」

彼の言葉使いが、いつになく皮肉っぽい。ミルドレットは慌てて、「べ、別に迷惑なんて思っていないし。それに、レイチエルときたら、最近では、私たちなんて当てにしないで、すっごく怪しい奴らとつるんでるみたいなのよ。中国のバイヤーとかいって」

「中国の？ それ、本当か」

「それにね、ロンドンでは連続して殺人事件なんかも起こってて、世の中は凄くぶっそうなのよ」

キースは眉をひそめた。これは、アトリエで模写なんてやってる場合じゃないのかも。

自分がぐずぐずしている間に、敵は、レイチエル どんどん悪徳商売の幅を広げてゆく。

「ミルドレット」

少し焦った風の若手画家は、椅子からがたと立ち上った。真摯な眼差しを目前の少女に向けて言う。

「ごめん。俺、ここでの日々の生活に慣れるので精一杯で、ちっとも、お前を助けてやれなくて」

彼女にとっては、その琥珀色の瞳が、クセモノなのだ。

「わ、わああ……」

ミルドレットは、自分でも訳のわからない声をあげてしまった。

こんなウダツのあがらない貧乏画家に、いつもいつも、何で、こ  
うなの！？

……が、

「キース?!」

それに追い討ちをかけるように、真正面にいた彼が、突然、彼女の肩を抱きかかえるように倒れこんできたのだ。

「ち、ちよ、ちよっと、待って! いくらクリスマスだからって、まだ、昼! お昼よ! そ、そんなのって心の準備がっ」

何っ、この予想のできない急展開!

別に嫌じゃないけど……ないけど、でもっ。

けれども、

「……あー、徹夜続きで、ふらついた。やっぱ、少しは寝ないと色々、考えても無駄か」

むっくりと体を起こして、傍で寝息をたてているパトラッシュの方を見た青年画家。

支えにした少女に詫びを入れるでもなく、彼は、そうだよなっと自己完結して相棒の頭をなげている。

何、これ……。

ムカつく。

ミルドレッドは、つかつかと、中型犬と戯れる画家に歩み寄ると、「キース、あんた、睡眠不足でころりと逝っちゃうかもよ。すっごく顔色が悪いもん。何か蒼ざめてる感じ!」

そう言い捨ててから、頬をぶうっと膨らませて、アトリエから出て行った。

顔が蒼ざめてる?

「嫌な事を言う奴だなあ！」

ミルドレッドの足音が、廊下の向こうに消えてゆく。アトリエのガラス窓に映った自分の顔を眺めてから、キースは、そんな事ないよなつと、横で大あくびをしている、パトラッシュに同意を求めよう目に目を向けた。

顔が蒼ざめている……すると、その脳裏に急にアンナの姿が思い浮かんできた。暗い館の中で一人で彼を待っている少女……。華やかに笑うミルドレッドとは裏腹に、寂しげに微笑むアンナ。その明暗がキースの心を痛くした。

やっぱり、あの娘は放っておけない。

「パトラッシュ、アンナの館に行くぞ！」

握っていた絵筆を油壺の中突っ込むと、ミルドレッドが持ってきたワインとホールチーズ入りの袋を手取る。それと、アンナのデッサンをキャンパスバックに詰めてから、キースは、パトラッシュに向かって言った。

「でも、その前に、あのエクソシストを何とかしないとね」

俺が、肖像画を描きあげる前に、あいつにアンナを被われてたまるもんか！

街はずれの教会に向けて駆け出したキースの後を追いながら、くわん、くわんとパトラッシュが鳴いた。

幽霊だって、構うもんか！ 僕らはあの娘を守るんだ。

と、パトラッシュが言ったかどろかは、定かではないのだが。

\* \* \*

エクソシストのいる教会は、パトラッシュがちゃんと、昨日、その場所をつきとめていてくれていた。悪魔祓い・エクソシストなんて聖職は、とっくの昔になくなってしまっているはずなのに、今では街の下級神父が教会の宣伝のために、やっているだけに違いな  
いと、キースはたどり着いた教会の前で大きく眉をひそめた。

大聖堂とは比べるのも馬鹿らしいような、ちっぽけなボロい教会だが、

「気をつけるよ。あんな奴でもアンナを吹き飛ばしただけの霊力は持ってるんだからな。何か胡散臭い力だったけど、侮れないぞ」

キースは、手にアンナが差し入れしてくれた袋を持ったまま、パトラッシュを伴い、そうつと教会の中へ入っていった。

祭壇の上に無造作に置いてある、悪魔祓いに使えそうなニンニクの花飾りや、聖水や、杭などの禍々しいグッズの山々。オカルト映画の見すぎじゃねえのと、ちつと舌を打ち鳴らす。その時、

「誰だ、そこにいるのは？」

祭壇の裏の方から嫌な声が響いてきた。あの神父の声だ。キースは、大急ぎで、懺悔室の中に飛び込み、神妙な声音でこう言った。

「神父さま、私の話を聞いてくれますか？」

「もちろんですとも。悩める子羊よ、ここでは、何の気兼ねも要りません」

俺が“悩める子羊”かよ。

ぷつと笑みをもらしてから、格子窓の向こうの自称エクソシストに言う。

「私は先日、町はずれの洋館で神父様とお会いした画家です。あの時は、神父様にひどい事をしてしまいました……私は、本当は、あの悪霊から逃れたくてたまらないのです。けれども、駄目なんです。逃れようとしても、つい足があの洋館に向かってしまうのです。特に、あの“12枚目の肖像画”を目にしてからは……」

すると、神父が急に声を荒げた。

「“12枚目の肖像画”だって！？ あの洋館にあった肖像画は、11枚のはずだ。それは、確かなんですか！ あなたはそれを見ただんですか」

「はい。すごく可愛い少女の絵で……でも、見ているだけにすれば良かったんだ。私は、つい、その12枚目の肖像画を家に持ち帰ってしまったんです。ああ、でも、その直後から、私の周りにおかしくなことが起こりだした。テーブルが知らぬ間に移動したり、心なしに、肖像画の少女の髪が少し伸びているような気もして……さすがに怖くて、今日は、その絵をここに持ってきてしまったのです」

「ち、ちよつと待った！ それは本当ですか」

慌てふためいて、エクソシストが言う。

「は、はい。もう、自分ではどうしようもなく、神父さまのお力を借りようと、今、ここに」

アンナの11枚の肖像画を狙っていた業突く張りのエクソシスト。その上に、“12枚目の肖像画”の存在までちらつかされては、美味しすぎる話だろう。その心を感じ取って、キースは思わせぶりな声を出した。

「こんな物をいつまでも持ち続けていると、いつか私は悪霊に憑り殺されてしまいます。だから、私はこの懺悔室の中にこの“悪魔の絵”を置いて、そつと教会から出てゆく事をお許し下さい。後の事は神父さまにお任せします。焼くなり煮るなり、好きにして下さい」

「わかりました。3分、待ってから、私は懺悔室にその“絵”を取りに行きます。後のことは私に任せて、どうぞ、安心してお帰り下さい」

3分？ 何だかインスタントラーメンみたいだな

くすりと笑うと、キースは懺悔室から出て行くとした。……が、ここまで、アンナの肖像画にこだわる神父の不審な態度が気になつて仕方がなかった。

「あの神父さま……1つだけ、質問していいですか？」

「……何だね？」

「あの洋館にあった、11枚の肖像画つて、一体、誰が描いた物なんでしょうか。もしかして……すごく有名な画家だったりして」

すると、神父は急に声を高めて、

「そんな事、私が知っているはずがないでしょう！ でも、何故、そんなことを聞くんですか!？」

ちえつ、しらばつくれやがって。お前がレイチエルとつるんでは、お見通しなんだぞ。

けれども、キースはここで逸る心を抑え込んだ。

深く探りを入れたいのはヤマヤマだけど、これ以上やると、かえって怪しまれる。

「いえ、ちょっと、無名にしてはいい絵だなあって……ほら、僕、画家だから色々分っちゃって。じゃ、この絵の後のことは本当によろしく願います」

そして、懺悔室を後にしたキースは教会から出てゆくフリをしながら、礼拝堂の座席にパトラッシュと身を忍ばせた。やがて、神父

がいそいそと、懺悔室にやってきた。

その時だった。

「行けっ！ パトラッシュユっ！」

キースに促された、相棒パトラッシュユが、懺悔室のエクソシストに向かって猛ダッシュをしたのだ。

「お前は、あの時の番犬っ！！」

有無を言わさぬ力で、懺悔室の奥にエクソシストを突き飛ばす。

そして、ずんぐりした体とは思えぬ素早さで部屋から飛び出し、パトラッシュユは、その扉をばたんと体で押し閉めた。

「騙したな！ 出せっ！ 出しやがれっ！ 神の御使いの私にこんな真似をすると、天罰が下るぞ！」

聖職者とは思えない品の悪い台詞を吐きながら、エクソシストが叫んでいる。

「パトラッシュユ、扉を押さえとけっ、あいつが出てこれないように！」

周りにあつた、出来る限りの椅子や机を積み上げて、キースは懺悔室の扉の前にバリケードを作り上げた。

ドンドンと懺悔室の中から、力任せにたたかれても、扉がびくとも動かない事を確認して、

まあ、こんなもんかな。

と、にやりと笑みを浮かべると、扉とは反対側の懺悔室の格子窓の方から、中のエクソシストに向けて、こう言った。

「残念でした！ “12枚目の肖像画”はまだ、製作中なんだ。けど、懺悔室の中の袋は、俺からの差し入れだよ。クリスマスが終わったら出してやるけど、それまでは、ワインとチーズでよろしくやっつけ！」

エクソシストはわけの分からぬままに、足元にあつた袋の中身を

見る。中にはミルドレッドがキースにもってきたワインとホールチーズが入っていた。

「ふざけやがって!」

彼は、ただでさえ、悪い人相をいつそう悪くしてそう叫んだ。

「ふざけてなんかいないよ。神父さんにもクリスマス休暇を楽しんでもらおうと思ってさ。自分で食べたいところを我慢してあなたに献上したんだから、有難いと思ってよ。それ、きつと最高級のワインとチーズだぜ」

なんてたつて、あのセレブなお嬢様、ミルドレッドが持ってきたんだから。もつとも、こいつにはクリスマスを祝おうなんて気持ちはいはこれっぽっちもないんだろうけどな。

キースは、苦い笑いを浮かべると、開けた懺悔室の窓をぱたんと閉めた。

「悪霊の下僕つ!! よくも騙したな。こんなことをして、ただで済むと思うなよ!」

「何で? 有難いと思ってよ。聖なる夜に、イエス・キリストみたく、最後の晚餐を気取らせてやるうって言うのに」

パトラッシュに“行こうぜ”と、手招きしてから、キースは懺悔室の窓に向かって、

「メリークリスマス!」

勝ち誇った声で、そう言った。

そして、教会から外に出る時に、玄関の扉に大きく張り紙をした。

“神父は不在。クリスマスの間は、この教会は休業します”

それから、キースは、パトラッシュを伴って、大急ぎでアンナの待つ古い館に向かって走っていった。小脇に描きかけた彼女の肖像画を抱えながら。

\* \*

アンナのいる古い洋館。それがあある手前の路地にさしかかった時、「何だ？ 何があつたんだ」

キースは、いつもと違う街の喧騒に眉をしかめた。ざわざわと集まっている野次馬の群れ。パトカーと救急車のけたたましいサイン音。

野次馬の中の一人の男に声をかけると、

「人殺しだつてよ。殺られたのは、中国人らしいけど、咽喉をナイフで一突きだつてよ。……ついに、ロンドンの殺人事件がピータバロ市にも飛び火してきたのかねえ、怖いこつた」

中国人？

さつき、ミルドレッドがレイチエルが中国のバイヤーとつるんでるって聞いたばかりだが……。

まさか、殺されたのって、そのバイヤーじゃないだろうな。

少し不安になって、相棒のパトラッシュと目と目を見交わす。

けれども、くわんと小さく鳴いた中型犬に、キースは、

「分つてるって、今は、アンナの所へ行く方が先決だもんな」

とは言ったものの、何か心が心に引つかかっていた。アンナの11枚の肖像画……それを手に入れようと、集まってきた胡散臭い奴らが、彼らを嫌う誰かに始末されたとしたら……。

彼らを嫌う……でも、それって、誰だ……？

けれども、枯れた蔦がびっしりと蔓延っている洋館の入り口に立った瞬間、キースの背中には、先ほどとは違った悪寒が走った。

ぴりぴりと空気が張り詰めて、気のせいか、空の遠くから雷鳴のような、ごろごろいう音が響いてくる。横にいるパトラッシュに不安げに目を向け、小さくため息をつく。

「あいつ、相当、怒ってるな。教会で思いのほか、時間をとりすぎたから」

手には、ここにくる途中の店で買ってきた、クリスマスケーキを持っていた。でも、こんなもんでアンナの機嫌をとれるはずもない。

時間は午後6時を回っていた。きつと、昨日、別れてから、ずっと俺たちを待っていたんだ。でも、怒っていろいろが、相手が幽霊であろうが、俺だって画家のはしくれた。もう肖像画を描くと決めたんだから、後には引かない。

「入るぞ……パトラッシュ」

覚悟を決めて、扉を開けた。その瞬間、

部屋をぐるぐると飛び回る椅子と机、ちぎれんばかりに、窓でなびくカーテン。これって、まさかあの心霊現象 - ポルターガイストってやつ？ 自分に向かって飛んできた花瓶を紙一重の所でかわしながら、キースは叫んだ。

「アンナ、いるんだろ？ 遅くなって、ごめん……でも、ちゃんと絵は描くから！ だから、この狂った部屋どうにかしてくれっ」

描きかけの肖像画を掲げあげながら、館の中へ入っていった。割れた花瓶のガラスの欠片が、顔の横をかすめて頬を切り、血がにじみ出る。

「邪魔するなら、この肖像画は破っちまうぞ！」

すると、風がぴたりと止んだ。そして、キースとパトラッシュの目の前に白いドレスに赤い上着を着た小さな少女が姿を現した。

「本当にクリスマスが終わるまでに描いてくれるの？ 本気なの？」

「そのつもりがなかったら、こんな場所にまた来るもんか！」

アンナを埃だらけのクリスマスツリーの前に座らせ、キースはキャンパスに向かった。前に描かれた11枚の肖像画は、どれもこれも、このクリスマスツリーを前にして描かれている。埃まみれで、ボロボロで昔の見る影もないツリーだが、そこは想像力にモノをいわせて、同じようなタッチで、他の物とイメージを変えないように描かなければならない。

絵筆を握り、アンナの顔を見つめて思わずつぶやく。

「顔色が悪いなあ」

「仕方ないでしょ、幽霊なんだから」

蒼ざめた少女の表情に、そりやそうだと、少し考えてから絵筆を動かし、肖像画の頬に淡いピンクをおいてみる。すると、とたんに肖像画の中に華やいだ空気が広がりました。

へえ、やっぱり可愛い

小リスみたいな大きな瞳の少女が、こちらを見てる。自分が描いているにもかかわらず、キースはちょっと、その絵の中のアンナの姿に魅せられてしまった。

生きている時はさぞや、愛らしい少女だったんだろうなあ。

「何？ 何で、うるうるしてるの？」

キースの様子を見て、アンナが首を傾げながらキャンパスの傍にやってきた。自分の絵をじっと見つめている。すると、ぼろぼろ涙を流し始めた。

「ど、どうしたんだよ？ 泣く事なんて何もないだろ」

俺の描いた絵が下手だからとか、そういうんじゃないよな。キースは、少しうろたえながら、アンナの顔を覗き込んだ。「生きてる頃を思い出した。パパがいて、ママがいてクリスマスには暖かい暖炉が燃えてて……でも、今は誰もいなくて、私の手はこんなに冷たくて……」

なす術もなく見つめるだけのキースに、何やってんだよ。と言いたげなパトラッシュが、アンナに駆け寄っていった。くわんと一声鳴きながら、その傍に体をよせる。

「あつたかい」

アンナが微笑む。キースも何か言った方がいいのかなと思って近づいてはみたが、言葉がでない。すると、いきなり、アンナが自分の腕の中に飛び込んできた。

冷たすぎるよこの子の体。

なんだか、哀しくってたまらなくなってしまった。

いくら幽霊だって、震えながら泣いている小さな女の子を突き放す事なんてできるもんか。

ふうつと一つ、息を吐き、キースは思い立ったように両手でそつとアンナを包み込んだ。

もう、いつか。ずっと、こうしていても……今日はクリスマスイブだもんな。

キースは、そつと目を閉じた。そして、アンナは、はにかんだような笑顔を頬に浮かべた。

\* \* \*

12月25日、クリスマスの朝

何か風邪気味だ。それに、ふらふらする。

鼻をすすりながらキースは、キャンパスに向かい続けていた。朝の光を嫌ってか、アンナの姿は辺りには見えない。パトラッシュは相変わらず、彼の傍に寝そべっている。

昨日は、あのまま、眠っちまったもんなあ。絵は描けなかったし、そついや、クリスマスケーキを食べるのも忘れてる。

とはいっても、肖像画はあと少しで完成のところまでできていた。

最後の一笔を入れた時、キースは

「出来たっ！」

と、いつにない大声をあげてしまった。ところが、

「アンナ、出来たぞ。出てこいよっ」

何回呼んでも返事がない。何でだよ、あんなに待っていた肖像画なのに……。

俺の絵に文句でも、あるのかと館の大広間に飾ってある11枚の肖像画をキースはじっと見つめてみる。それでも、さっぱり分からない。やっぱり、この絵でも、気に入らなかつたとか……。

それにしても、気分が悪い。何だか体まで熱くなってきた。おまけにひどい眩暈がする。

そういえば、悉くアンナの気に召さなかつた今までの彼女の肖像画は、どこへいったんだ？　そして、それを描いた画家たちは……？

そんな事を考えていると、ぞくつと背筋に冷たいモノが走っていた。

部屋の壁にかけてある鏡にふと目をやると、顔が凄く蒼白い。

“キース、顔色が悪いわよ。何だか蒼ざめてる感じ”

昨日、ミルドレッドに言われた言葉が頭をよぎった。

まさか、みんな、憑り殺されてしまったとか……。そういえば、昨日、洋館の周りであった殺人事件。もしかしたら、あれも、アナが誰かを使ってやらしたんだっただら……。。

いや、あり得ない！ アナが悪霊のわけがない。

その時、パトラッシュユがくわんと鳴いて、埃だらけのクリスマスツリーの下へ走っていった。

「パトラッシュユ？」

この声に誘われるように、クリスマスツリーの下にキースは歩いていった。そのとたんに天井がぐるりとまわった。

駄目だ……。本当に熱っばい。

思わず、その場に膝をつき、手を床につけて四つんばいになった時、埃にまみれて落ちている人形に気がついた。それを拾い上げてから、ふと、もう一度、壁に掛けられた11枚の肖像画に目をやると、

クリスマスツリーの飾りが……

「これか?! そうだ、きつと、これを忘れていたんだ」

具合が悪いなんて言ってるんじゃない! 急いで、キャンパスに向かうと、もう一度、絵筆をそれに向けて動かした。11枚の肖像画の

背景にいつもあったクリスマスツリー、そこにいつも飾られていた、この人形。

「アンナ、出て来いよ。出てきて、これを見てくれよ。“12枚目の肖像画”がやっと、完成したんだ」

キースがそう言い終わるか終わらないかのうちに、小さな少女の幽霊が彼の前に姿を現した。

「そう、その人形は私の大のお気に入りだったの。今までの画家は、誰もその人形をクリスマスツリーに描いてくれなかった。ありがとう、それに気付いてくれて」

……でもね、それだけじゃなかった。この画家のお兄さんは、あまり分つてないみたいだけど。

にこりと微笑むアンナに向けて、キースは無言で描きあげた肖像画を差し出した。

「これ壁に掛けていい？」  
少女の問いに、何だか寂しいような気分がうなづく。何故なら、この先の展開が少し見えてきてしまったから。

アンナの後姿が薄れてゆく。

壁に掛けられた12枚目の肖像画に向かいながら、少女は一度だけ、キースの方を振り向いた。

「あのね、もう一つだけ、私のお願いを聞いてくれる？」

「……もう一つだけって？」

「この館にかけられた11枚の肖像画は、実は幻なの。本物は1枚1枚が別にされて、収集家たちに売りさばかれて……けれど、その1枚はロンドン郊外のグレンって男爵の館にあるらしいの。……あ

のエクソシストにしても、もしかしたら、私の肖像画を不法に売り飛ばそうとする者たちが、沢山いるのかもしれない。そんな事に大事な肖像画を使われるのは、絶対に嫌！ だから、探して。そして集めて。私は12枚の肖像画をあなたに持って欲しい。それが、私の最後の願い！」

キースは、ややこしい事になりそうな展開に眉をしかめる。けれども、これだけは聞いておかねばと思い、

「……アンナ、あの中国人を殺らしたのってお前？」

「は？ 何のこと」

ぼかんと口をあけた少女の表情がめっちゃめっちゃに可愛い。そうだよな、どう考えたって、この娘がそんな事をするはずがない。それにしても……

肖像画を描いたら、こんな幽霊とは、きれいさっぱり、おさらばしようと思っていたのに、最後のお願いなんて言われてしまったら、断る事もできないじゃないか。

「わかった……。でも、一つだけ、俺に教えてくれよ。肖像画を描いたアンナのお父さんって、一体、何処の誰だったんだ？ 確か有名画家だって言ってたけど」

「わからないの。私には、画家っていう以外には何も教えてくれないよ」

キースは次の言葉を言おうとしたが、みるみるうちに薄れてゆくアンナの姿に、もうその時間はない事を悟ってしまった。本当にお別れの時が来てしまったのだ。何だか泣いちゃいそうだ。

少し翳った彼の琥珀色の瞳。すると、幽霊の少女は、

「あの……もう一つだけ、お願いしていい？」

おい！ さっきのが最後のお願いじゃなかったのかよ。

盛り上がった青年画家は、彼女の言葉に拍子抜けしてしまっ  
た。

「えっと……とりあえず、言ってみて」

「……あの、キス……」

「キス？」

「あっ、あっ、もちろん、頬にでいいからっ！」

そう言ってから、アンナは、少し後悔した。この際だから、頬な  
んて制約はつかけなかった方が良かったかもしれない。

けれども、琥珀色の瞳の青年は、はにかんだようなアンナの表情  
に少し心を奪われて、

「眠り姫は王子さまのキスで眼を覚ますんだっけ？ けれども、幽  
霊の女の子は、売れない画家のキスで永遠に眠りにつくのか。本当  
にそんなんでいいの？ 俺は王子様には程遠いけど」

こくと何度も頷いた少女に、柔らかな笑みを浮かべる。そして、  
キスはアンナの頬に軽くキスをした。

「ありがとう。ほんとうに……」

消えてゆく。

メリークリスマス

鈴のようなその声と姿が完全に消えてしまった時、

やっぱり、最後はこういう事かよ。

何もない荒地の中に、キースとパトラッシュはぼつんと、座り込  
んでいた。彼らの前に残されていた物は、食べそこねのクリスマス

ケーキと、自分が描いた12枚目の肖像画。

それ以外は、幽霊のアンナの姿も、あの古い洋館でさえもその場所には何も残ってはいなかった。

はあと息を吐き、キースはつまらなそうにクリスマスケーキの入った箱に手を伸ばした。

幽霊でも、別に良かったのに。

それは、寒い12月の空気の中に消え入りそうな声だった。けれども、白い息をはずませると、にこりと笑い、キースは傍らにいたパトラッシュに言った。

「ようし、家に帰って、一人と一匹でケーキでも食うか!？」

\* \* \*

クリスマスの街を歩く、キースとパトラッシュ。大聖堂からは、高らかな聖歌隊の賛美歌が響いてくる。

「レイチエルに言われた絵の模写を終えてないけど、もう、今日は帰ってゆつくりするか? やっぱり風邪をひいたみたいで、気分がよくないや」

けれども、くしゅんと鼻をすりパトラッシュの頭をなげた時に、キースはふとその場に立ち止まって、耳をすませた。街角から絹のような繊細な旋律が響いてきたからだ。

歌……? \*

高々と鳴り響く賛美歌の間を縫って聞こえてくる、物憂げな声の方に目を向ける。すると、王宮美術館通りの階段に座って、歌を口

ずさんでいる若い男の姿が視線に入ってきた。

黒いレザージャケットとブーツ。丹精な顔にかかる亜麻色の髪。

わずかな人々に囲まれて、その男は天使の歌を歌っていた。

ここからは空が見える

君の瞳に似た青い空

ミカエル

君の瞳だよ ミカエル

でも夜は眠れないんだ

絞首台に上る朝に、

白いパンと蜂蜜が運ばれるような日が

いつかここへやってくると思うと

僕は君を待っている

だから愛して 僕を愛して

ミカエル

( by M・polnareff )

「ストリートミュージシャンか何かか……？」

けど、クリスマスにしては哀しげな歌だ……それに、あの男って、どこかで見たことがあるぞ。

聖なる夜の清らかな空気が、その男のいる場所だけ、暗く重い。  
キースは、彼のいる場所へ歩いて行こうとする。けれども、その時、大聖堂から午後のミサを告げる鐘の音が響いてきたのだ。

いけねえ、あいつの事を忘れてた。

突然、教会の懺悔室に閉じ込めたエクソシストの事を思い出し、キースは、ポケットをこそごと探った。通りで寄付金集めをしていたボーイスカウトの少年に5ポンドを差し出して言う。

「街外れの教会で神父さまが助けを待ってる。俺が行ってあげたいけど、ちょっと忙しいんだ。クリスマスの奉仕してんだろ？ その5ポンドで有料奉仕だ、さっさと行ってやれよ」

「えー、嫌だよ。街外れの教会って、あの怪しいエクソシストの教会……」

だが、ボーイスカウトの少年が、そう言い終わる前に、キースとパトラッシュは、お役ご免と、その場から、そそくさと逃げ出してしまうていた。

「ちえ……、仕方がないなあ」

少年は、手に握らされた5ポンドに目をやり、所在なさに教会に向けて歩いていった。

ちらちらと、雪が降ってきた。天使の羽のようにふわりふわりと舞い降りてくる純白の輝きに、若い画家は琥珀色の瞳を輝かせる。

「クリスマスが過ぎれば、すぐ大晦日だ。そして、新年がやってくる」

雪の結晶に彩られた空に湧き上がる大聖堂からの鐘の音は、これまでのどのクリスマスの夜よりも、美しく荘厳に青年画家の耳に響

いてきた。先ほどの男のことなど、すっかり忘れて、キースは、横を歩く中型犬に目をやり、にこりと微笑んだ。

「色々あると思うけど、来年もよろしくなっ。パトラッシュ」

その答えに、彼の相棒は、くわんつと元気に一声、鳴いた。

【ピータバロ2 ～12番目の肖像

画～】 ～完～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2965e/>

---

ピータバロ2 ~ 12番目の肖像画 ~

2011年10月4日05時49分発行